

チェコ共和国における教育事情と実践報告 — チェコ文化に根差した自作道徳教材「野球から生まれた友情。夢に向かって」の 開発と実践 —

前在チェコ日本国大使館付属プラハ日本人学校 教諭

愛知県あま市立甚目寺南中学校 教諭 八 神 進 祐

キーワード 国際理解教育、道徳教育、チェコ文化、自作教材、国際貢献

赴任校の概要（2025年8月1日現在）

在チェコ日本国大使館付属プラハ日本人学校

APONSKA SKOLA V PRAZE

URL：https://www.jpnschool.cz/

児童生徒数：小学部70人 中学部22人

1 はじめに

チェコ共和国は、豊かな歴史と文化を誇り、首都プラハはその象徴的な都市である。国際理解教育の要は「教師自らが現地の文化に飛び込むこと」だと考え、チェコ各地を巡り、食文化やレジャー文化などを体験した。

これらをもとに、チェコ文化を伝える授業を構成し、2022年には日本の小学校でオンライン授業を実施した。さらに、ケーブルテレビ番組を担当する機会も得た。こうした活動が評価され、2024年3月にチェコ政府公認「チェコ親善アンバサダー」に認定され、人とのネットワークが広がった。この経験を生かし、プラハ日本人学校での教育活動に取り組んだ。



プラハ城と城下の町並み

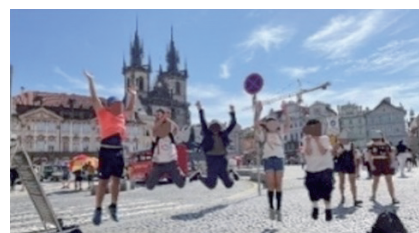
2 プラハ日本人学校の概要と特色ある教育活動

プラハ日本人学校は、チェコ共和国の首都プラハにある在外教育施設で、小学部・中学部に約90名が在籍している。チェコの環境を生かし、ウォークラリーや写生会などで五感を通じた文化学習を行うほか、日本文化の行事も実施し、両国の伝統をバランスよく学んでいる。

しかし、コロナ禍で現地校との交流は中断した。そして2024年度、本校が文部科学省による研究指定校（AG+）に選定されたことを機に、私は研究主任として「チェコと日本の文化を学び、自己表現力を育む」をテーマに新たな交流の形を模索した。ビデオレターや訪問交流などを実施し、成果が評価され研究発表の機会を得ることができた。こうした活動を通して、本校は国際的な視野をもつ次世代の育成に重要な役割を果たしている。



プラハ日本人学校の外観



行事：ウォークラリー

3 自作教材の開発の過程と具体

(1) チェコ野球について

チェコには道徳教材になり得る素材が多くあるが、2023年3月に開催された野球の世界大会WBCでのチェコと日本の試合は日本でも話題となった。実際、私も試合観戦した際にチェコのフェアプレーやスポーツマンシップなどに感動した。このストーリーは国際理解教育において高い価値があると考え、チェコ野球を中心とした自作道徳教材の開発に取り組むことにした。



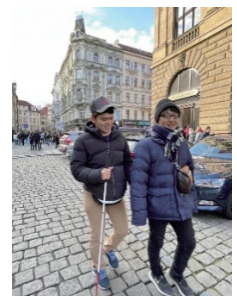
イーグルス・プラハの球場

まずは、現地チェコでの野球観戦をするところから教材研究を始めた。すると、さまざまな驚くべき発見があった。長年、共産主義に苦しめられていたチェコにとって野球は自由の象徴のスポーツであること、アマチュアであるため、本職と野球との二刀流であること、家族や仲間、環境に感謝をしながらプレーしていること、そして対戦相手や審判、ファンをリスペクトしていること。私は、それらを現地という特等席で感じる事ができた。

(2) 視覚障がい日本人学生とチェコ代表主将の交流―野球から生まれた友情―

ある日、私がチェコ野球を球場で観戦していたところ、「日本の方ですか?」と声をかけられた。話しかけてきたのは、日本の同志社大学の学生、山田翔登（やまだしょうと）さんであった。山田さんは、生まれてすぐに緑内障を発症し、視力を失った過去をもつ。幼い頃からラジオで野球を聴くことが最大の楽しみの1つであるという。山田さんは、2023年WBCの日本対チェコ戦を音声で観戦し、チェコ代表の紳士的なプレーや、野球を心から楽しむ姿に感銘を受けたことをきっかけに「チェコ野球を現地で感じたい」という思いが心から溢れ、勇気を出して、たった1人でプラハまで訪れたとのことであった。

山田さんの滞在目的はチェコ野球の観戦のみだった。視力の関係もあり、観光は控え、ホテルと球場の往復のみを予定していた。しかし、話をしていくうちに、私は「この機会を生かし、山田さんにプラハの街の魅力を実際に感じてもらいたい」と考え、共にプラハ市内を周り、案内することにした。



チェコ文化を体感する山田さんと八神

プラハ旧市街を歩く中で、石畳の感触、街の音や空気を山田さんに感じ取ってもらった他、チェコの伝統的な料理も味わってもらったなど、チェコ共和国の文化を全身で楽しんでもらうことができた。山田さんの旅の最後に、何か特別な体験を用意できないかと考え、思い切って、チェコ代表主将のペテル・ジーマ選手に連絡を取った。事情を説明すると、「もちろんだ。今すぐ彼に会わせてくれ」と快諾をいただいた。すぐに時間を調整し、山田さんの宿泊先で対面することとなった。



山田さんとジーマ選手の初対面

2人は、これまでの人生の軌跡やWBCの感想、将来の夢について語り合った。山田さんは「英語を生かして法律関係の仕事に就きたい」、ジーマ選手は「引退後は若い選手の育成に貢献し、チェコ野球をさらに発展させたい」と、それぞれの目標を語った。

この出会いは、ジーマ選手のSNSを通じて大きな反響を呼び、チェコ国内のニュースでも取り上げられた。さらに、日本でも「Yahoo!ニュース」に掲載されるなど、多くの人々の関心を集めた。

(3) プラハ日本人学校への訪問「生き方講演会」

障がい乗り越え努力する山田さんの姿は、子どもたちに大きな学びを与えると考え、さまざまな人生の歩みから学ぶ「生き方講演会」を、山田さんをプラハ日本人学校に招く形で開催した。

講演では、どのように努力を重ねてきたのか、壁にぶつかったときにどのような気持ちで乗り越えてきたのかを語っていただいた。さらに、多くの人の支えに感謝しながら生きることの大切さについても触れ、子どもたちにとって深く考えさせられる時間となった。

また、点字体験などのワークショップも行い、視覚障がいがある方の世界を体感することができた。こうした貴重な体験を通じて、自分らしく生きることの意義や、夢に向かって努力する大切さを改めて実感する機会となった。

後日、チェコ代表主将のペテル・ジーマ選手も本校に招くことができ、同じく「生き方講演会」を開催した。ジーマ選手は、こちらからのオファーを快く受け入れてくださった。

講演では、チェコ野球の強さは「チームメイトとの絆」にあると語られた。競技人口が少ないチェコでは、同じ世代の仲間と長年プレーを続けることが多く、互いを深く理解し合いながら成長していく。その長年培われた絆こそが、チェコ野球最大の強みであるとのことであった。さらに、夢に向かって努力を続けることの大切さ、支えてくれる家族への感謝、そして仲間の存在が何よりの財産であることを熱く語られた。その言葉は、子どもたちの心に深く響き、多くの学びを得た講演となった。

(4) 2人の再会―夢に向かって―

山田さんとジーマ選手が出会ってから約1年。山田さんは再びチェコを訪れ、ジーマ選手のシーズン最終戦の応援に駆けつけた。試合が終わると、2人は再会し、それぞれの近況を報告し合った。

山田さんは、「オランダの国際刑事裁判所で働くことになりました。多くの人を助けられるよう頑張ります」と新たな挑戦を語った。ジーマ選手も、「チェコ代表のコーチを務めることになったよ。若い選手のために全力を尽くすつもりだ」と、新たな役割への意気込みを伝えた。

かつて語り合った夢と目標に向け、それぞれが努力を重ね、2人はついに道を切り拓いた。異なる分野ではあるが、志をもち続けることの大切さを共有する中で、2人の絆はさらに深まった。



山田翔登さんによる生き方講演会



ジーマ選手による生き方講演会



再会したジーマ選手と山田さん

以上の(1)～(4)をもとに、自作の道徳教材を開発し、授業実践に取り組んだ。また、授業の対象に応じて内容を適宜調整し、より効果的な指導を目指した。

4 授業実践「野球から生まれた友情。夢に向かって」

(1) 日本に住む子どもたちへの授業実践

【対象：小学4～6年生】

さまざまな縁があり、愛知県、岐阜県、大阪府の小学校計8校、それぞれ別日に4～6年生を対象としたオンライン出前授業を実施した。

授業前半では、まずチェコの基本情報を紹介し、生活様式や食文化の違いに着目させることで、子どもたちの興味を引き出した。授業後半では、チェコ野球の歴史や背景、選手たちの想いを伝えた後、山田さんとジーマ選手のエピソードを通して、困難を乗り越える力や夢に向かって努力する大切さについて考えさせた。さらに、授業の終末には、山田さんをサプライズゲストとしてオンラインで招き、山田さんの言葉を直接子ども達へ届けた。子どもたちは真剣な表情でそのメッセージを受け取った様子であった。以下は、授業を受けた子どもたちの感想である。

- ◆僕も叶えたい夢があります。この授業を受けて、頑張っていることを続けていきたいと思いました。
- ◆チェコのことを知れて本当に良かったし、ジーマ選手の気持ちに感動しました。山田さんのお話が聞けて、勇気が出てきました。

岐阜県C小学校で授業をした際には、新聞社の取材が入り、授業内容や山田さんとジーマ選手のエピソードが3度にわたり掲載された。

また、大阪府のD小学校では、この話に感動した児童たちが「もっと多くの人に伝えたい」と考え、このエピソードを「チェコの奇跡」と名付け、紙芝居動画を制作したと連絡があった。授業を通じて、子どもたち自身が主体的に動き出し、学びを広げていくという良い影響を与えることができた。

チェコ野球というテーマを通じ、子どもたちが異文化を学ぶだけでなく、人の生き方や夢に向かう姿勢について深く考える機会となった。



紙芝居動画「チェコの奇跡」

(2) プラハ日本人学校の子どもたちへの授業実践

【対象：中学部1～3年生】

特別の教科道徳にて「国際貢献」をテーマとした授業を実施した。導入ではチェコ野球の歴史や背景、日本との比較を行った。授業の中盤では、2023年WBCでデッドボールを受けたエスカラ選手に送られた拍手の意味を考察した。その行為は、単なるスポーツマンシップではなく、相手チームへの敬意や国を超えたリスペクトの象徴であ



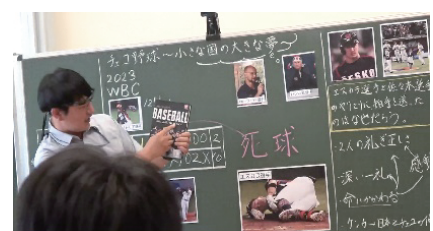
授業前半：チェコと日本



授業前半：自作道徳教材の授業



中日新聞による記事



プラハ日本人学校の生徒へ授業

ることを学んだ。後半では、盲目の学生・山田さんとチェコ代表主将ジーマ選手の交流を取り上げ「なぜジーマ選手は快く応じたのか」を問い、友情の芽生えについて考察した。1年後、2人が夢を実現し、それが国際貢献につながったことに気づいた。以下は、生徒の感想である。

- ◆チェコで野球をする人たちは、日本とはまた違うものを背負ってプレーしていることが分かりました。だから相手をリスペクトする気持ちでいつも試合をしているのだと思いました。
- ◆山田さんとジーマ選手の夢に向かう姿を見て、私も国際貢献をしてみたいと思うようになりました。プラハ日本人学校の行事を一生懸命にすることが国際貢献につながっていくのだと思いました。

授業を通して、「国際貢献」は特別な行為ではなく、在外教育施設における日々の行動や他者との関わりの中にあることを学ぶ機会となった。

(3) チェコの現地校の生徒への授業実践【中等部1年生】

チェコの現地校で道徳授業を実施した。チェコの学生は、登場人物の気持ちを考える、いわゆる「日本の道徳授業」に馴染みがない。しかしここはあえて、話し合いなどを通して、人物の気持ちを考える授業に挑戦した。なお、英語と簡単なチェコ語を用いて授業を展開した。

導入では、「WBCでチェコと日本が試合をしたことを知っていますか?」と問いかけたが、多くの生徒が知らず、チェコでの野球の認知度の低さを実感した。そこで、チェコのアイスホッケーの強さと日本の野球の発展を紹介し、両国のスポーツ文化の違いを説明した。さらに、競技人口の違い、野球用品店の少なさ、球場の選手ポスターの相違点など具体例を挙げると、生徒たちは驚き、関心が高まっていった。

授業後半では、視覚障がいがある山田翔登さんとチェコ代表主将ジーマ選手の交流を紹介し、ジーマ選手がなぜ快く対面を受け入れたのかを考え、ワークシートに記入、発表させた。生徒たちは「スポーツを通じた心のつながり」「国や障がいを越えた絆」について深く考えることができた。以下は生徒の感想である。

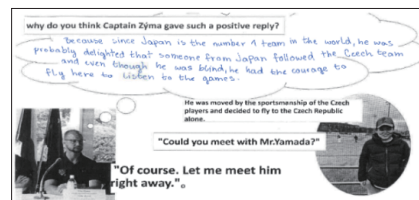
- ◆私にとって新しいことばかりで、とても楽しいレッスンでした。興味深く面白かったし、日本に興味をもちました。教えてくれてありがとう。チェコ野球を観たくなったし、日本にも行きたくなった。



チェコ現地校で授業



使用した授業スライド



ワークシート：ジーマ選手の気持ち

5 おわりに

本実践を通して、スポーツを活用した国際理解教育の有効性を確認できた。特に、山田翔登さんとジーマ選手のエピソードは、障がいの有無を超えた友情や夢に向かう努力の大切さ、その先にある国際貢献に気づくことができる教材となった。授業後には、「チェコ野球を実際に見たい」「国際貢献に挑戦したい」といった声が上がったり、日本からチェコに手紙や年賀状などが届いたりするなど、学びが子どもたちの行動変容につながった。

帰国後の赴任校では、海外で得た経験を日本の教育に織り交ぜ、次世代の子どもたちに広い世界と深い学びを提供することを使命としたい。